

2013 年調査結果概要

東京農業大学 小林万里

①防除対策～音波発生装置の忌避効果～

2012 年イルカ除けの音波発生装置（20～60kHz の周波数の音がランダムに、音圧 145dB で発生する）を設置したところ、1 ヶ月ほど効果あり。

しかし、アザラシの可聴域は 0.25～60kHz（ちなみに魚：0.02～3.5kHz）と言われており、イルカ除けでは聴こえない音があると推定+大きい音で生簀に近寄せない効果ありとの報告。⇒アザラシ用の音波発生装置（10～50kHz で音圧 150dB）を改良。

2013 年に 9 月 15 日に岬の 3 定置の陸網、9 月 30 日にそれ以外の 17 定置の陸網、10 月 15 日は希望定置網の沖網に設置してもらい効果検証を行った。その結果、丸岬の陸・沖網の被害尾数の割合・被害尾数も、設置後 3 日間は沖網>陸網。さらに、音波発信器個体も、3 日間は陸網には来ていない。アザラシの混獲は、設置日翌日から陸網にも混獲されていた。しかし、沖のカレイ刺で同様の音波発生装置を使ってもらったところ、効果があるかもとの報告もあったため、現段階では効果は不明。また、2013 年は、忌避装置を設置した翌日は漁に出られないほど、海が荒れたため、環境音にかき消された可能性も考えられる。

②生態学的モニタリング

2013 年の混獲数は 91 頭であり、そのうち 54 個体を収集した。54 頭のうち、37.0%が雄、61.1%が雌であり、その 66.7%が当歳獣であった。

2011 年～2013 年に収集した襟裳の個体と、道東の個体を比較すると、襟裳のみは道東個体より有意に大きく（但し、サンプルサイズに問題あり）、♀は道東個体より有意に小さいことが判明。さらに、80 年代の個体と比較しても小さくなっていることが判明した。

2013 年の個体からの胃内容分析の結果、マダコ類およびスルメイカ、カジカなどが主要な餌生物であり、54 頭のうち、22 歳の個体と 2.5 歳の個体にサケの捕食が認められた。

③生息個体数の推定

2013 年ヘリセンサスと陸上センサスとの見落とし率からの推定等を行い、10%～30%程度の誤差が認められた。

④定置網の利用様式

2011 年～2013 年の結果を総合すると、ゼニガタアザラシの 1 歳以上の個体が、襟裳岬の岩礁から近く、水深の 40m 以浅の海底が広い東側を、夜間に毎日定置網を餌場として利用していることが判明した。特に、2013 年の特徴としては、これまであまり利用していない西側も昼にも利用する割合が高くなっていた。

⑤被害の特徴

2013 年は、広尾でのアザラシの混獲数が増加（2011 年は 1 頭、2012 年は 3 頭、2013 年は 10 頭）、西側（荻伏）でも混獲の情報あり、えりも漁組の西側でも東側でも被害が見られるようになった。

さらに、2013 年の上陸岩礁から一番近い東側の定置網では、高い被害割合（13.9%）を示した。朝の被害割合（被害尾数）が 31.1%あった他、昼の被害日数割合（被害尾数）も増加傾向であったため、さらにこの定置網での被害が増加する可能性あり。